

みなさん、こんにちは。初めに今日学ばせていただきます範囲を拝読させていただきたいと思
います。テキストの十二頁ですね。「印度西天之論家」から「明如来本誓応機」までを、ご一緒に拝
読させていただきたいと思ひます。

印度西天之論家 中夏日域之高僧

はるか西方、印度の論主（龍樹・天親）、
中国・日本の高僧
（中国—曇鸞・道綽・善導、日本—源信・源空）がたは、

顕大聖興世正意 明如来本誓応機

釈尊がこの世にお生まれになった真意を表し、
阿弥陀の根本の誓いが、
人間そのものに応える救いであることを明らかにされました。

どうも有難うございました。

先程はご住職様のご導師のもと、「正信偈」をご一緒にお勤めさせていただきました。今年もご
一緒にお参りさせていただいて、本当に有難いことであるということ、しみじみと感ずることで
ございます。また先週お話しさせていただいたことを副住職様が早速まとめてくださいます、本当
に有難うございます。頭が下がります。こうして「正信偈」を、明順寺様で一緒に聴聞させていた
だくということは、本当に有難いことでございます。

ご承知のようにマスコミでは、座間の事件が取り上げられております。白石隆浩容疑者、二十七
歳。九人の若い、尊い命が奪われていったということで、大変ショックな、悲しいことで問題にな
っております。彼自身が非常に深い、人間の闇を抱えているということと同時に、そういう人を生
み出した現代の社会ということも問題であります。

彼に責任があることは勿論であります。決してしてはならない、あってはならないことを犯して
しまったということがあるわけです。しかし彼には隣人、家族があり、友があり、先生があり、色
んな人間関係の中で育ってきておるわけであり、私は大変悲しいことであると思つと同時に、
決して私たちと無関係であるとは言えないことだと思ひますね。

これは親鸞聖人がおっしゃっておられますように、

「十方衆生」というのは、十方のよろずの衆生なり。すなわちわれらなり。

(真宗聖典 五二一頁)

十方のよろずの衆生というのは、ありとあらゆる人々のことです。それは私たちであるということ
をおっしゃった。本願のことを大悲の願と申しますが、特に十方の衆生の救いを誓われるというこ
とは、根本の願いであると同時に、大きな悲しみの願いですね。十方の衆生にかけられておる悲願
でありますから、一人ももらさずかけられておるのであります。白石容疑者にかかっているわけ
はないのです。悲願はかかっているけれども、聞こえない。聞こうとしないと、どうなるかという
問題があります。

私は親鸞聖人の「われらなり」という言葉に触れる時、そういう人間のいのちの深い繋がり

が付かないと、「彼ら」にしてしまうと思います。「われら」と「彼ら」とは大違いです。もし「彼ら」というならば、私は絶対そんなことはしないと隔絶する。隔絶するというのもね、具体的な名前を出して言うのもあまり良くないかもわかりませんが。何とかさんという人が国境に高い塀を立ててというようなことを、今の時代でね。そういうことを言って、それが人々に受けるということの、また誠に悲しいことなのでありますけれども。

申し上げたいことは、人間の抱えている闇の深さであります。殊に現代は便利化社会でありまして、私たちもその恩恵を受けているのでありますけれども。この便利化社会の抱えている闇の深さ。白石容疑者に関わった方は、一都四県に広がる十代、二十代の若い女性ですね。そこにはITという電子による繋がりがあるからこそ、あれほど広い範囲で三か月の間に九人も犠牲になるという事件が起きた。便利化社会の闇だなということを感じます。

だから便利化社会ということは便利であるけれども、諸手で喜ぶことはできない。この調子で進化していくと失業者が二人に一人になるというような話もありましてですね。どこまでこういう便利化社会の追求が進んでいって、歯止めがかからなくなるか。大きな問題を抱えておるわけでありまして。

私は白石容疑者の問題について一番思うことはですね、よき人のおおせに会うか遇わないかということですね。先程、三帰依文と一緒に拝読させていただきました。やはり本当によき人、よき教え、仏陀に帰依するというのを失いますと、己が天下になります。自分自身の有限性、相対性、愚かさ、罪悪性に気が付かないで、己を良しとしてしまう。よく申し上げることで言うならば、自是他非という。己を良しとして他を悪とする。他を利用するという。白石容疑者も誠に冷静で鬼畜のような鬼のような精神を持っていた。若い人が死にたいという、そういう悲鳴をあげる。自分が死にたいということではない。まあ報道に見ますと死にたいということを書いて誘って、そして餌食にしたようですが。

阿弥陀の本願の第一願に、「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」ということがあります。それはあくまでも現実社会の人間の姿に触れた悲しみの願であって、地獄・餓鬼・畜生ということが現出しているという。それは釈尊の時代だけじゃなくしてまさに現代に、スケールの大きい深い状況で現出していると。また現出する危険性を秘めておるといって、そういう問題です。

だからよき人のおおせに会うか遇わないかということは人生を決定するような、大事件ですね。そういうことに気が付かないと、自損損他。自分自身を損ない、人様をも損なうと。これは決して他人事ではありません。私自身も親鸞聖人の教えにお陰様で出遇いつつあるわけですがけれども、恥ずかしながら死にたいと思ったことがございます。一度や二度じゃないということがあるわけですが。よく死なないで良かったと思う者の一人ですけれども。

やはり、特に若い時はね、矛盾ということに敏感だと思えるのですよ。世の中一つ捉えてみても、楽して儲けている人と、汗水流して働いて楽にならない人。家庭の中で最も親しく大事にしなければならぬものが、いさかいをする。そういうことがあって、矛盾に満ちた社会。そういう中になんで生まれてきたのかという。頼むところがない。そういうことに捉われますとね、自損損他、自ら損なうだけじゃなくして他も損なうと。

それに対するのが自利利他ですね。自ら本当に生きているということ深く喜ぶ、尊ぶ。そのことが自ずから他に及ぼしていくと。これは菩薩道ですね。菩薩道というのは、架空のことではなくて、人間が本当に人間になると。そして迷いに終わらない、仏陀となるべく人生を歩むという。それが菩薩道ですね。菩薩道というのは好きな人だけやっていいってそんなね、呑気ない加減な話ではないのですよ。人間が生まれて生きるということにおいては、自らが本当に尊い人生をいただ

いたと、そのことにおいて、人々の上に、自ずと伝わっていくということがあります。

先程の白石容疑者のこともね、非常に率直な感情で言えば、親は人を殺せとて産んだかと。人を殺したくなる、衝動的になる。親は人を殺せとて産んでくれたかということが微かでも蘇って来ればね、それは決して微かでは終わりません。微かであっても微かでは終わりません。そこには家庭の環境とか色んな問題があり、本人の関心の問題もありますけれども。生まれて何が一番大事なことで見出してきたか、また伝えられてきたかということが私たちの生活においては、大事なことであると思います。

その点、今の時代というのは大変厳しい時代ですね。犠牲になった九人の十代、二十代の人たち。中学生、高校生。悩む時期ですね。そして死にたくなるということがある時期ですね。自殺者の人口が年間二、三万ぐらいということで報告されております。死にたいという思いを抱えつつ生きておる人たちが本当に多いのだなということを感じます。便利化社会で表面的には豊かのように見えるけれども、相談する相手、心の中を語る相手がいないという。そういうことがね、大きな問題。

だからよき人に会うというのは、成人してからだけの話ではなくて、やはり生まれてこのかたですよ。もっと言えば私たちは真実を求め、真実を明らかにし、真実を生きられた人々の大いなる伝統の中にあるわけです。そのことに気が付かなければね、そういうものをないがしろにし、否定するわけですよ。金だけが大事、学歴だけが大事、権力が大事とかそういったものをね、誇大に主張する。

これは恥ずかしながら前にも話した記憶がありますが、まあ母親代わりになって育ててくれた姉から「世の中は厳しいからお金は大事」と言われたことがあるのですよ。私は、「いや、お金だけが大事じゃない。お金より大事なものがある」と。まあおかげで未だに貧乏しておりますが。やはりね、金より大事なもの。教えの伝統の中では、肉体のいのちより大事なものは、仏法であると。何故いのちより大事なものであるのかというと、肉体のいのちの尊さが領かれなければ、いのちを粗末にすると。自らを傷付け、人様をも傷付けて憚らない。そこにいのちよりも大切なこと。それは仏法であるということ、教えてきておられる。そういういのちをかけて求めて来られたという伝統があるわけですね。そういうことをまず思います。

よき人のおおせに会う、遇わないかということが本当に人生の根本的な大問題である。それは十方衆生のすべての人々が求めておられることであると。それは本願が十方衆生に呼びかけておることにおいてはっきりしているわけです。だから人間は大きな大悲の世界に会いながら、どうしても私たちの世界、彼らの世界というふうに区別だけじゃなくして差別して憚らないと。差別というのは、非常に私は傲慢だと思うのですよ。彼らに絶対わかるものかと。もしそう思うならば、自分はわかっているということにおいて自己是にして驕っておるわけですね。

本願の精神は先程申しました、十方衆生の一人ももらさずです。一人ももらさずという精神は、誰が一番よくわかりますか。自分自身ですよ。自分の属している社会から、あるいは家庭から漏れてごらんない。もっと言えば除け者にされてごらんない。とてもじゃないが生きていけない。だから本願の精神は十方衆生に立っておりますけれども、その十方衆生の一人一人というところに、軸足が立っているわけです。決して私たちがその他大勢の中の一人ではありません。あなたこそ目覚めていただかなければ、一体人生は何ですかということですね。

だから人間の生きておる、一人ひとりの尊厳性ですね。尊くして厳粛な事実であるという。これ以上に尊いものはないという尊さですよ。それは仏法に会うということにおいて、そういう尊さに遇うと、気が付くとね、すいません、微量な話をして恐縮ですが、うんちすることも、しょんべんすることもね、無意味ではないのですよ。それあるがゆえにいのちをいただき、そして大事な人間としての歩みをしていくことができるという。そういうね、全存在。

まああえて全存在と申しましたのは、私たちのいのちを生きていただいて生きておる存在そのものですね。金があろうがなかろうが、歳を取っていようがいまいが、生まれが良かろうか悪かろうが。そこに一人の人間がいるならば、その人のすべてが人間に生まれて良かったと。本当に言えるかどうかという問題ですね。そういうことをすでに親鸞聖人が、あの時代の厳しい状況の中でよき人、法然上人に会うことにおいて、自ら助けられ、三世十方の人々に表明しておられる。

私は親鸞聖人の『教行信証』を表わされた精神は、三世というものは過去現在未来ですね。十方衆生ということは、何も日本人だけではないですよ。この歴史の歩みにおいて、あらゆる人々、生きとし生けるものに。私は親鸞聖人の教えに触れて、絶対に忘れてはならないことがあると。それは人間中心主義ではないという。蜻飛蠕動という葉虫や毛虫や蛆虫やね。そういうものすらが念仏に遇って信心に触れて、喜ぶという。そういう表現があります。

これは今の時代殊に大事な表現であろうと思います。人間が行き詰りますとね、素晴らしい山河、大地の中にも、海が美しい、山が美しい、花が美しいと、見えなくなるのです。閉塞するのです。いくら恵まれた環境の中にもその環境が恵まれていると気が付かない。閉塞するという。閉じ塞がるというそういう闇。

よく言われることでは、大事な方を亡くされたときに、残された者は閉塞しますよね。もう死んだ方がいいと。あの人の後を追っていきたいということまで出てきます。その閉塞性から立ち上がるということは容易ではありません。そういう人間の抱えている闇が深い。その闇の深さの底の底まで呼び覚ましてやまないというそういうのが真実の教えである。まあ「正信偈」はそういうことを端的に言われております。これは「正信偈」を学ぶときに親鸞聖人のお言葉で、

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に闋して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく
(真宗聖典二〇三頁)

信知という言葉は身に受けていただいて、本当に事実として尊く受け止めていく。無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつると始まるのですね。だからその「正信偈」を作られる前に大聖の真言に帰し。これは仏陀釈尊がこの世に表れて、仏陀として表れてくださって、そこにまことの教えを説いてくださった。

それから大祖の解釈というのは、その仏陀釈尊の教えを本当に尊い教えとして身に受けて証明していったくださった七高僧ですね。印度中国日本とその教えを、身命をかけて伝えてくださった。大聖の真言は「正信偈」の中で言えば、前半のほうの依経段。仏陀釈尊のおおせ。『大経』。『大経』の本願真実。本願を説いて、経の宗とし、仏の名号を説いて、経の体とするという。本当に簡潔に、要を表してくださった。要というのはそれがなかったら人間が人間とは言えないと。要という言葉でよく言われますのは扇の要ですね。要がなければ扇が扇の役割をしないと。だから要ということは、それがなければ人間の姿をしているけれども、畜生というようなね。そういう一番大事なところを抑えておる。

だから大聖の真言に帰し、大祖の解釈に闋してということは、『大経』の真実をいただき、その『大経』の真実を本願の真実を印度中国日本において、真の高僧の方々がいただいて来られた、その仏恩の深遠なること。深く遠いということがいかに深い歴史を貫いているかということですね。

そして今、現に、私自身の上にはたらいっていると。具体的には親鸞自身の上にはたらいっているその仏恩の深遠なること。こういうことがね、親鸞聖人は私たちの上に、その私たちの上にということを煩惱具足の罪惡深重の私たちの上に表れてくださるという。生々しい言葉で言えば、『歎異抄』の第一章にある、煩惱熾盛ですよ。煩悩が燃え盛るわけですよ。やむことがないという。そう

いう煩惱熾盛と。

煩惱熾盛というのは、誰のことかと言えば、私たちのことである。私自身のことであると。だからここまで徹底してくださっておると。悲観的に人間を見たのではないのです。誠心誠意、本当に身を削るような努力をしてみても、ああ煩惱熾盛でありますという。そういう自覚ですね。中には、類まれかもしれませんが、修行したおかげで煩惱がなくなりましたという人もね、おられないわけではないけれども、それはその人として立派かも知らんけれども、肝心要の問題があります。それは、私の道とはなりませんと。二度とない人生。私の生きる、そして死んでいく道となるか。これは誰も避けることができません。そういう自分自身が歩む。それこそ生死を託する道となるか。これは避けられない問いですね。

大聖の真言に帰し、大祖の解釈に関して、仏恩の深遠なることを信知して、正信念仏偈を作りて曰わくと。こういうことは非常に深い感動、喜びがね、込められております。「正信偈」は『教行信証』の中の念仏を讃え、信心を讃える短い偈文ですが、本当に尊ばれるのは、あらゆる人間存在のですね、本当に訴えてやまない。捉えてやまない、そういう真実のはたらきそのものですね。

蓮如上人のときに「正信偈」、三帖和讃をお勤めの中でいただいていくということが伝わってきたと言われておりますけれども、「正信偈」をいただく、和讃をいただくというようなことが私たちの人間の生活の中で開かれてきたということがもう大したことだなど。本当にこんなに素晴らしいことはないと言わなければならないようなことだと思うのですね。

今日いただきました前回のテープ起こしのですよね、三頁ですか。補足として載せてくださった、「正信偈」の展開ですね。「正信偈」は大きく総讃、依経段、依釈段に分かれています。依経段というのは、『大無量寿経』に依る。依釈段というのは七高僧に依ると。この前まではですね、『大無量寿経』に依って、弥陀釈迦の尊いおおせ、真実のおおせを讃えてくださったと。今日拝読したところは依釈段。七高僧の教えとして伝統されておると。印度中国日本。その総讃。総じて讃えるというところが今日の二行四句の印度・西天の論家、中夏・日域の高僧、大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に応ぜることを明かすという。その一段であります。

これは私はね、非常にスケールの大きい表現だと思うのです。そして、感動が非常に深いと思うのです。印度西天というのは仏陀釈尊が生まれ、そして覚りを開かれて仏道を説かれた。その仏陀釈尊を尊敬し、教えをいただかれて仏道を生きられた。そういう、はるか西方、印度の論主という。龍樹菩薩、天親菩薩。そういう方々ですね。

それから中夏というのは中国ということで、夏というのは大きなという意味があります。世界の中心になるというような意味もあるようではありますが。広大な世界を表すときに中夏。日域というのは日本のことでありまして、日域大乘相応の地というような言葉もあります。はるか西方、印度の論主、中国・日本の高僧。中国では曇鸞大師、道綽禪師、善導大師。日本では源信、源空。この方々のごとくというのは、その依釈段の中で歌われているわけですね。

これから七高僧の方々の教え、恩徳に出遇わせていただくということでもありますけれども、印度・西天の論家、中夏・日域の高僧というような言葉によりますとね、今のこの時代感覚とはね、はるかに違ふと。今でこそ、地球が感覚的な表現すると小さくなって、ロケットはわずかな時間でもあるというようなことがありますけれども。釈尊の時代、また親鸞の時代から言うと、印度とか中国というのはもうはるかな、遠いということです。そのはるかに遠いって言うことは例えて言えば『歎異抄』の第二章ね。おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなりと。普段関東から京都におられる親鸞聖人を尋ねて行かれるについても、十余か国もの国境を超えて、身命をかえりみずしてという。

力士の方がね、横綱になるときに、時たま言われることがありますね。不顧身命という。身命をかえりみずしてという。こういういのちを投げ出して、まことの教えを明らかにしたいと。まことの教えに遇わなければ、生きても無惨にむざむざと終わってしまうのではないかという。そういう人間の危機感ですね。危機感というのは本当に大事なものであると思います。いのちをいただいているというところには、それが自ずとね、状況や事柄において表れてくるものだと思うのです。身命をかえりみずしてということは根本の問題。根源の根本の問題。それを明らかにするには身命をかえりみずして尋ねずにはおれないという。そういう願いですね。

西天というのははるか西のほうにある世界。中夏というのは中国の非常に広い世界であります。印度・西天の論家、中夏・日域の高僧。そのはらかな仏陀釈尊の生まれられたその土地から、はるばるこの日本の日域に生まれ、届いたという。そういう感銘ですね。感動ですね。

印度では言葉が違うわけでしょう。中国だってそうでしょう。言葉の違い、時代社会の姿の違い。あらゆる違いを超えて、貫いて。時代の違い、民族の違い、社会の違い、価値観の違い、そういったものを超えて、貫いて。超えて、貫いてというのは上のほうを飛んだってということではないのですよ。一人ひとりの人間の闇の底にまで響いて伝えられてきたと。だから私は印度・西天の論家、中夏・日域の高僧というような言葉が非常に遇い難くして遇うことを得たということの、非常に深い感動が讃えられていると思いますね。

高等学校の時に漢文の時間があって、「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」という論語の言葉が未だに身に感じるのでありますけれども。やっぱり遠方より来る。そこに深く遠いという。大きな恩徳触れる。大きな恩徳に触れることにおいて、遠くの朋だけが尊いのではないのです。自分自身が身近にいただいているご縁が尊いと。究極的には自分という一人の存在がなんとまあ受け難い人身であったか。尊い身であったかということに本当に気付く、目覚めると。そういう意味があるかと思うのであります。

大聖興世の正意を顕すというこの顕ですね。顕かに顕す。大聖興世の正意。大聖興世というのは仏陀釈尊がこの世界に仏陀として、誕生してくださった。道を説いてくださった。その本当の願い。本当のお心。それは『歎異抄』の中では簡潔に本願を信じ、念仏を申せば仏になるという。本願念仏の教えをこそ説いてくださっておると。本願念仏の教えこそ、説いてくださってあると。大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に応ぜることを明かすことを明らかにするという。二つとも明らかにする。大聖興世の釈尊出世の本懐が顕かになる。釈尊出世の本懐が顕かになるということは、私たちの一人ひとりがこの世に生まれた本懐が顕かになると。釈尊出世の本懐が顕かになったけれども、私の本懐はわからんというのでは、明らかになっていないのですよ。釈尊の出世の本懐が顕かになるということは、誰の上に明らかになるのかと。私たち一人ひとりの上に明らかになる。

だから人間に生まれたということが、何で人間に生まれてきたのかということが明らかになる。だから自殺されたいという願望の方はね、これは已むに已まれないようなそういう事情とか色々お有りになるけれども、それは決して結論ではないということなのです。出遇っていくべき歩みの中にある。そこからどれ程尊い素晴らしい道が開けるかわからない。そういう大道。大いなる道の中にありながら、身近なことで行き詰りを感じるともう駄目だと。死んでしまった方がいいというような感じになってしまうということですね。

如来の本誓というところには、本弘誓願という本当に広い仏の願いがですね、如来の本弘誓願。阿弥陀の本弘誓願。法蔵の本弘誓願。機に應ずるということは、機というのはずばり言えば人間存在です。仏法を受ける器となる機ですね。機というところにはですね、機微という言葉があって。機微というのは微かなものに触れて感ずるといようなことですね。機微。微かなことに。例えて言えば、不安とか疑問とかっていうようなことが起こってもそれは単なる不安や疑問じゃなくし

て、そのことに光が当たればね、そのことをご縁として非常に深い根本のところまで至るといふ。この機微といふ。

それから機関。それはこの法が、その人に遇って、その人が動き出すといふ。動き出すのですね。法が触れると動き出すのですよ。法が触れないと極端な言い方すると殺人に走ると。法に触れると、殺人じゃない、自分が生き、人が生きるというそういう道を求めずにはおれないと。もっと言えば、自分という存在一人が、どれ程大きな恩恵、歴史の中にあるかといふようなことを見出していくといふ。それから機宜。宜しくにかなうといふ。

これは機といふことについてこういう言葉で説明されるのですが。法にかなうべき存在としてですね、私たちはいのちをいただいていると。そういう如来の本誓、機に応ずると。人間のあらゆる問題、根本問題に本当に応えると。応じて表れる。機に応ずるって凄いい言葉です。応機といふのは、機に応ずる。理想を説いたっていふ話ではないのですよ。あらゆる人間の問題。根本問題。それを明らかにし、それに応える。それが応機です。

だから私たちはその法を受ける機として存在としてあるといふ。これはもう人間の生きておる意味が、根本的に大きな仏法の真実の中に見出されてきたといふ意味があるわけですね。それは『観無量寿経』の中では、韋提希夫人とか頻婆娑羅とかそういう方は申すに及ばず、阿闍世すらが仏法に遇うべく大きな存在であると。逆害を起こしたことを通して、その悲劇、悲しみ、無惨なる悲しみ、懺悔の中から仏法に出遇うといふ。そういうことが『教行信証』の総序にも言われ、信巻にも言われておるのであります。いかに私たち人間存在の闇の深さと同時に根本問題。根本のところまで至って、徹底して本当に大切なことを表わしてくださると思ひます。

私はそういった意味で親鸞聖人の明らかにされた浄土真宗は、時代を超え、社会を超え、民族を超えて、貫いておるのでありますけれども。そこにはその時代、その時代の、その社会、その社会の一人ひとりの一番深い闇の底にまで至り届いていると。便利化社会といふことを申しましたが、現代は釈尊の時代や親鸞聖人の時代と状況は比較するならば、これ程便利化になった社会はないと。それははっきりしていますよね。しかし、闇はまた深いと。これまでになかった闇の深さがあると。親鸞聖人の時代には、一発の爆弾で何十万人といふ人を殺すものはありませんでした。しかし今は、原爆や水爆で、全部使えば地球破壊できるといふことすら言われております。笑って言えないのですけどね。それ程の矛盾を抱えているのです。それ程の矛盾を抱えておしながら、危機感の欠落ですね。相も変わらず武器を持たなければ、平和は実現しないといふそういう人間の考え方の迷妄、迷いが、中々迷いと言えないようなそういう深い闇ですね。

当に末法五濁の世といふのは今の時代ではないですか。今の時代こそ、私は本当に末法五濁であると思ひます。それはその日安心して飯が食べられず、その日安らかに眠るところがないような、そういう方々が地上には沢山おられながら、片一方では巨額の予算をかけて武器を作り、人を殺す兵器を作っておるといふような。そのことに対して問題すら感じないような、そういう矛盾に満ちた時代ですね。だからそこには矛盾が矛盾として見え、そしてそこに悲しみ、痛みを感じることが、むしろ人間であること健康性、健全性ではないでしょうか。どうでしょうか。そのことはお互いによく考えてはっきりしなきゃならんことだと思ひますのであります。

それはね、私たち一代だけの問題ではなくて、深いご縁をいただいで、私たちの後から来る人々の上に、大きくかかっていくわけですよ。そういう三世十方といふことも、私たちは過去の問題をどう受け止め、それを現在どのように生きて生かして未来に伝えていくかといふ。そういう大きな役割を担っていると思ひます。

親鸞聖人はそういう人間の抱えておる、この世界の現実の抱えておる大きな問題に触れて、往生浄土の道を求めていかれた。往生浄土といふことは、往生は死ぬことだといふ了解は根強くありま

すけれども、親鸞が言われた往生というのは死ぬことではなくして、もし死ぬというならば、人間の煩惱、妄念に死んで、本当に生きるということです。本当に生まれ、本当に生きる。まあ曾我先生は前向きに生きるという表現をしておられますし、開かれた精神生活。それを生きよと。浄土というのは本当に開かれた世界ですね。光明無量寿命無量。一宗一派の話ではないのですよ、浄土というのは。あらゆる衆生の、人間であるならば、浄土のはたらきというものを、見出さずしては、感ぜずしては、本当に開かれないという、そういうような意味ですね。光明無量寿命無量。そういう往生浄土の道をただ念仏一つ、信心一つに開かれていこうという。そういうことを明らかにしてください。

そこに応機という。機に応ずるといふ。これはですね、『歎異抄』の後序にある、

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。
(真宗聖典 六四〇頁)

つねのおおせとして述懐しておられるわけですよ。ひとえに親鸞一人がためなりけりという親鸞聖人の表白に触発されて、私たちはひとえに中津功一人がためであったというふうに受け取ることができる。

しかしここでいう一人というのは個人的な一人ではありません。あらゆる人間の問題を抱えておる一人なのです。それを忘れたら個人的になります。閉鎖的になります。狭くなります。そうではありません。本当に一人一人がはっきりするということにおいて、十方衆生の中の一人であると。過去現在未来という永遠なる時の中に、人として生まれ、人として生き、人としてのいのちを終わっていく。念仏者として生きることができるといふそういう遇い難い法に遇い、遇い難い人のいのちをいただいて、仏陀となるべき仏弟子として生きることができるといふ。そういう発見ですね。

そういうことが「正信偈」の中にはですね、短い偈頌の中で感動を込めて歌い上げられています。だから偈頌として歌い上げられているということは、私たちもまた何度も何度も聞いて、いただいて、喜んで、讃嘆して称えらる。歌うことが出来ると。そういう道がこの今の時代の厳しい時代の中でここに私たち一人ひとりの上に開かれておるのであるという。そこに三国七高僧の仏道の伝統の尊さ、有難さがこの身に沁みていただかれる。受け取られていくという大いなる讃嘆ということ、教えられるのであります。時間がちょっと過ぎたようでもありますので、いつも長くなる癖があります。話の方は、今日はこれで切らせていただきまして、後は質疑と座談ということで宜しくお願いします。